

「地域」の形而上学 —その存在論的ニッチ niche を探る—

太田 茂徳 *

Shigenori OHTA*

A Metaphysical Essay about Ideas of “Region”:
Ontological Issues about the Boundary Setting for “Region”

Abstract

I believe that the concept of object identity is important for human geography. As an academic object of human geography, it is necessary to think that it is ontological sameness, not diversity or complexity. In this essay, we will consider the conceptual way of being based on identity, using “region” as an example. To try to understand it as something visible, there are some logical difficulties in the ideas of “region”. Because of these difficulties, it is difficult to set the content and boundaries of “region”. In this essay, I would like to refer to Niklas Luhmann’s idea of Soziale Systeme and reconsider the “region” as “system for observing the world”.

Through these considerations, I have shown the possibility that the “region” can be said to be “real / existent” without relying on the concept of matter. Then, as a framework to be used when discussing society and regions, I adopted a model of two different logical spaces that observe each other, not a framework of “human agency-social structure” and “micro-macro”. By assuming the actions that exist in different logical spaces, the relationship between “region” and “set of people” and “region” and “set of the surface” has been redefined.

I はじめに

人文地理学研究者は、自らの調査対象について、ある時点での分析対象とそれから（たとえば）5年後の分析対象を「同じ対象である」と考えて比較したり、複数の研究者が1つの同じ分析対象について議論したりすることができると思定している。その時、そこには「1つの対象」があることになる。

ここでは、こうした人文地理学が扱う分析対象を表す概念の1つとして「地域」について考えみたい。「地理学が学問の一分野となって以来、地域は地理学者にとって主要な研究対象である」（フリント 2014: p. 35）と言われるように、地域は歴史の古い概念である。僕は、自身の2019年の論文の最後で唐突に「人文地理学の学問的対象として、空間的な概念——それは空間や場所、地域や景観など様々であるかも知れないが——で表されるものは、果たして「モノ」なのだろうか？」（太田 2019: 56）と答えの出せない問い合わせをした。そこでは、フッサールの「像 Bild」概念に触れながら、「地表にしても、その上に築かれる建築物にしても、またそこに住まう人間の身体にしても、すべては物質として存在している」ことをもって「地域は物質的な存在である」とすることは、結論を急ぎ過ぎていることになるだろう」

（太田 2019: 60）としたが、答えを示すことはできなかつた。

こうした考え方の背景には、人文地理学における「地域」概念の内容が、

「等質性や機能的まとまりによって他と区分される地球表面の一部」（人文地理学会 2013: 88）

「周囲の地区とは異なるものとして判別できる、自然的あるいは人工的な特徴を持った地表の任意の区域」（田辺 2003: 197）

といったように、地球表面=地表の区画として示されることのは非がある。こうした地表へのこだわりは、19世紀から続く、人文地理学としての学問的アイデンティティにも関わるポイントだと思われる。地域とは、物質としての地表の区画として例示される。それは、「容器としての空間」や「境界線によって区切られた領域としての地域」というイメージをも伴うものである。

だが、こうした「地表としての地域」という定義というのは、私たちにとって扱いやすいものだろうか。こうした古くからある定義は、論理的に問題を孕んでいないだろうか。もう一度考えてみる必要はないだろうか。

「地表としての地域」の場合には、「地表には何が含まれているのか？」という「地域の内容 contents

included in region」の問題を引き寄せる。「地下や空中は何mまで地表に含まれるのか?」「建造物や人は地表に含まれるのか?」「人々の活動は含まれるのか?」「人と人の関係はどうなのか?」などである。この内容によって「等質性」や「機能的まとまり」が何を表現するのかが異なり、描かれる地域像は異なるものとなる。

それだけではなく、「どのくらいの大きさのものを地域と呼ぶのか?」という、地域と呼びうるものと呼べないものの間の規模をめぐる定義上の境界設定の問題が未解決なままとなっている。それは、一人分の座席から地球全体に至るまでの水準に地域という対象を見いだすのかという問い合わせている。ここで境界条件を設定しないことは、「砂山のパラドクス」と呼ばれる論理的な問題を引き寄せてしまう¹⁾。

このように「地表としての地域」という考えは、様々な未解決な問題を抱えているが、現状こうした論理的な問題に人文地理学は答えを見出せていない。

そこで本稿では、こうした問題に直接答えることを目指すのではなく、問題自体を書き換えることによって新たな可能性を探ってみたいと考えている。地域の内容の問題や地域の境界の問題が解決できないのは、人文地理学者たちの間での合意形成が困難であるからではなく、構成する断片の種類 kinds, category や全体の規模 scale, magnitude によって地域を規定するという前提が間違っていることを示しているものとして考えてみたい。本稿の目的は、「地域」という対象の存在論的な地位を明らかにすることである²⁾。

II 地域の実在性

「地表としての地域」という捉え方は、地域を実在として捉えることを可能にしている。人文地理学として調査対象を実在と考えることは、「客観的な科学」としてのあり方を保証してくれるものだと言えるだろう。そうした科学的なあり方を手離さないために、対象を物質的存在に設定するということが選択されているとも言える。こうした捉え方を、ただ単に「近代的な見方」だとして批判することもできるかも知れないが、ここでは多少は建設的に議論を進めてみたい。

上述したように、「地表としての地域」という捉え方は——内容の問題、そして境界設定の問題といった——論理的な問題を未解決なまま内包したもので

ある。それでも、実在を扱う客観的な科学としてのあり方を求めるために、こうした伝統的な定義は維持されてきたと言える。

しかし客観的な実在を扱うという方針は、地表を対象とすること以外では達成されないのでだろうか。ここには、論理的に見てまだ検討してみるべき点が残されていると考えられる。

「地域は地表の区画である」という命題を、「地域は実在である」という命題と結びつけることは、「地表=物質」として物質の実在性を利用している。こうした主張を「地域=物質」説としよう。地域は、地表の区画として、道路や建造物、そこに暮らす人などを要素あるいは部分として含む形で物質的構成 material constitution によって成立しているとする考え方であるが、構成する要素あるいは部分が物質的存在であれば、その物質的構成としての地域も物質であるという論理に支えられている³⁾。

これに対して、地域は研究者が設定した分析枠組みであるという反実在論的な主張がある。何を地域だと捉えるのかは研究者の問題設定に委ねられており、地域は分析上の構築物であるとする。こうした主張を「地域=規約」説としよう。この主張は、「地域=物質」説のような論理的な問題に悩ませられることはないかも知れないが、複数の研究が「同じ地域を対象としている」と主張できる根拠をめぐる「地域の同一性」問題を引き起こし⁴⁾、最悪の場合に極端な相対主義に陥ってしまう。

通常、「地域=物質」説と「地域=規約」説の2つの主張は排他的で対立していると考えられている。しかし「地域=規約」説は、言説や表象などの非物質的素材によって地域は構築されていると仮定するもので、「社会的構築物あるいは観念であるような地理学的対象——たとえば地域——は物質ではない、ゆえに実在ではない」という推論が成り立っている。この場合、「地域=物質」説との間で「実在するのは物質だけである」という理解を共有している⁵⁾。ここでは、明文化されてはいない前提1を加えて、

前提1：実在するのは物質だけである

前提2：地域は地表=物質である

結論：地域は実在する

という三段論法が働いており、前提2に疑問を差し挟むことは結論に異議を唱えることだと見なされている。この場合、「地域=物質」説も「地域=規約」説も、前提1を共有する議論であって、「実在／非実在」の区分は「物質／非物質」の区分に一致するものと捉えられている。事実上、「地域=物質」説と「地域=

規約」説の対立は、地域の内容の問題について、その内容を物質だとするか非物質だとするかを争うものとなっている。

その上で、「地域=物質」説は上述した論理的問題の解決が残されており、「地域=規約」説は極端な相対主義を回避する回路を確保しなくてはならず、どちらにしても未解決の問題は残されている。

しかし前提1は、これで必要十分に真であるような命題だろうか。前提1の内容にまで議論を広げるならば、「地域=物質」説に異議を唱えることは「地域=規約」説に立つことのみを指す訳ではなく、「地域は実在である」という結論に異議を差し挟むことを意味するものでもなくなる。

1 実在

ここでは、「人文地理学」という問い合わせの枠組みをはみ出してしまうかも知れないが、「実在するのは物質だけである」という考えを拡張することで、新たな実在のあり方を描いてみたい。

一般的には「実在」とは「ある(在る／有る)」として立論される。「実在するもの」とは「あるもの」、「実在すること」とは「あること」である。しかし、これは実在することを「ある」ということに置き換えるだけで、実在することの理解は深まらない。

「実在」とは、『岩波 哲学・思想事典』によると…

実在性 reality とは、「ideality (観念性) と対をなし」、「意識とは独立に事物・事象としてあるあり方を意味する認識論的概念である」

ということになる（廣松他 1998: 659）。このような事的な定義から読み取れるのは、人間の思考・認識からの独立した mind-independent 対象であること、主観によるものではなく「客觀性」を持ったものであること、そして「在る」ものだということです。

戸田山和久は、「実在論」という用語を定義する際に「大雑把に言って、「○○は人間の知覚や思考・心とは独立に存在し、それについての事実もそれらとは独立に決まっている」と考える立場を「○○にかんする実在論 (realism)」と言う」（戸田山 2015: 3）と述べて、様々な実在論がありうることを指摘している。「○○は実在する」と考えることは、「何に関する」実在論なのかという問い合わせ切り離すことはできない。したがって、哲学としての議論だけではなく、人文地理学に関する、地域に関する実在論を考えるということの意義もあると考えられる。

こうした問題意識の下で、ここでは「実在」あるいは「実在する」という考え方——「存在の非還元性」

と「観点からの独立性」として——捉え直すことで、実在に関する理解を拡大したいと考えている。

1) 存在の非還元性 non-reducibility of existence

「実在」は「在る」ということを含むのだが、先にも述べたように、「ある」をそのまま利用するのは難しい。ここでは、これを「実在=無いことにできない」へと拡張してみたい。ある対象・概念について、他の存在・概念・作用などに還元し、消去し尽くすことができない時、これを「実在する」と呼ぶことにしてみようという訳である。「無いことにできないもの」は、我々に対して「所与 given」として与えられていると考えることもできる。

「無いことにできない」ことを「実在する」とする発想自体は、決して突拍子もないものではない。唯物論者は、物質が原因となって知覚が生じるとし、かつその知覚は物質(脳や神経細胞)に還元できると仮定する⁶⁾。経験論における現象主義は、人が直接的に理解しているのは経験に現れる知覚像だけで、すべては現象に還元できるとするが、これは「世界に存在するのは現象だけである」という存在論を持っていると言える⁷⁾。このように、世界の存在を「本当に存在するもの」と「他の存在に還元されるもの」とに区分することは、様々な存在論が持っている一般的な論理である。

こうした「非還元性」を、それ自体が「ある」ことの根拠として考えることは、我々の日常的な理解から考えても妥当性はあるだろう。

たとえば、「ここに埋蔵金が存在する」と言う場合、この「埋蔵金」が「この私の想像」に還元されるならば、公的には「埋蔵金」は実在するとは見なされない。この時に説明の水準を掘り下げて、「この私の想像」が、私の脳細胞という物質によって成り立っているのだから埋蔵金も実在する、とは言わない。還元主義的な世界においても、ある特定の水準における非還元性によって実在、所与のものは決められている。

ここに十円玉が存在しているとする。十円玉は物質として「銅」の塊からできており、金属の銅は銅原子からできており、銅原子は陽子と中性子と電子ででき正在して、そしてそれは更なる素粒子ででき正在する、ということになる。ここでは、説明をどの段階・水準に置くのかによって、還元できるか、還元できないかという説明の妥当性が異なる⁸⁾。それは、「私の想像」を脳に還元するかどうかという話をしたが、対象について、説明が求められる内容、対象の存在のあり方によって、求められる還元のあり方が異

なっているということである。「銅の化学的性質」について説明をしているのであれば、通常は銅原子というレベルより下には還元する必要がないだろう。金属の光沢や加工のしやすさという物性について説明しているのであれば、金属としての銅の性質にまで還元されれば十分で、「十円玉」の硬貨としての価値について説明したい時に量子力学による説明を持ち出す必要はない。

このように、「何が実在するか?」について、どんな時にでも常に正しい還元の基準というのが存在する訳ではない。そこで行われている問題設定、議論している内容に応じて、正しい還元のあり方が求められている。この点に注意しなくては「何を実在として捉えるのか?」がはっきりとしない、ということを忘れてはならないだろう。

2) 視点からの独立性 perspect-independent

これも、「客觀性」ということに関する基準ということになるが、これまで客觀性は「主觀に左右されない」ということとして考えられてきた。「物質」概念がそうであるが、これまで「実在」という考えは、「心からの独立性」として知られる、我々人間の認識や思考から独立していることだ、という考えを用いてきた⁹⁾。しかしジョン・サール John R. Searle が「私からみるならば、実在性の定義が主觀性を排除すると考えることは誤りであるように思われます」(サール 2015: 22) としているように、主觀性を取り込んだ形での実在性の議論も可能だと考えられる。ここでは、「主觀に左右されない」ということを「その場の、どのような主体にとっても、同じものとして捉えられる」という風に言い換えてみたい。

視点からの独立性という考えは、実在の定義に含まれる「人間の思考・認識からの独立した mind-independent」という考え方の簡易版である。ある存在の実在が問題になっている時に、その場の議論に加わる人々が共通して「実在する」と見なしているものは実在だと考えようということで、すべての人の思考・認識を前提としないことである。これでも日常的な場面においては十分なはずで、私たちは日常の場面で「すべての人」を含意しうる人間の思考・認識を確認している訳ではありません。こうした議論の場に物理学者が居合わせて、説明を与えてくれ、そうした説明が「客觀的な説明」として機能することもあるだろうが、すべての人が参加する議論は現実的には成立していない。様々な人々を超えた存在の想定は、神の視点と同様にプラグマティックに確認すること

はできない。

もちろん、こうした「視点からの独立性」についても、「そこにはテーブルが1つある」と言う人と、「そこには、いくつかの木材がある」という人、それだけでなく「無数の原子がある」という人が現れると、存在論的なコンフリクト ontological conflicts が生じることになる。このことは、「視点からの独立性」がそれ自体として完結した論理体系ではなく、「存在の非還元性」の問題、そして前提とする世界観の差異と複雑に絡み合っていることを表現している。

先駆的に、そして無批判に、何かの存在だけを実在だと考えることは、こうしたコンフリクトの存在を無視し、調和的な世界観を打ち出す姿勢を表現することになる。この場合にも「存在の非還元性」の場合と同じように、「どのような問題が問われているのか?」という問題設定を共有するプロセスを経て、人々がどのように存在論的コンフリクトを調停しているのかということに着目しながら、各人の視点からの独立した存在が前提とされていくことで、人々の間の世界観が成立している様子が観察されなくてはならないだろう。「何かが実在である」と確定されている状況というのは、人々の間の存在論的コンフリクトが調停されて、「存在の非還元性」と「視点から独立性」の説明が人々の間で承認され、安定した状態に至っているということを意味していると捉えられる必要がある。

このように、ここでは「実在する」ということを「存在の非還元性」と「視点からの独立性」の両方を満たすことと定義して、議論を進めていくことにしたい。

III ある種の「まとまり」としての地域

これから議論で注目するのは、地域の伝統的な定義がもつ、他から区別される「ある種のまとまり」としての地域という考え方である。こうしたまとまりは、どのように捉えればいいだろうか。まとまりとは、どのような存在なのだろうか。

ここでは、「1つのまとまり」ということを「1つの全体 wholeness」と捉えて、議論を進めていきたい。

1 「全体としての地域」の捉え方について

(人文地理学の対象としての)地域が、どのように構成されているかを考えることにしたい。「構成の問題とは、どのような諸部分から一つの全体が構成されるのか(されないのか)という存在論的問題である」(柏端 2017: 35) が、その素材や1つ1つの構成要

素を挙げて考えることもできるが、ここでは「全体としての地域」のあり方について「全体と部分」そして「全体と要素」という点から考えを進めることにしたい。

「全体と部分の関係」を考えることと、「全体と要素の関係」を考えることは、厳密には異なっている。私たちが考える対象について、「部分=要素」という関係は常に成り立っているのではない。「全体と部分の関係」は、その分割方法が問題となり、分割の特殊な場合が「全体と要素の関係」となるのだが、「全体と要素の関係」においては「全体を重視するのか、要素を重視するのか？」によって立場が異なることになる。その点を確認しながら、見ていくことにしよう。

1) 全体 integrality と要素の関係の描き方

全体と要素との関係を考えることは、単純化してしまえば、それはシステム system としてのあり方を問うことになるだろう。この点について社会科学においては伝統的に、方法論的個人主義 methodological individualism と、方法論的集合主義 methodological collectivism という考え方方が存在している。こうした両者の論点を分かりやすく、「要素→全体」論と「全体→要素」論として考えてみたい。

分析にあたり、まず要素が存在し、こうした要素が全体を構成していると考えることが「要素→全体」論である。分析の独立変数の位置を要素が担い、全体は被説明項として従属変数となる。

これまでも、まず個々の実体を持った「要素」を考え、その要素の間に「相互作用」を考えることで「要素の集合」としての全体が成立するという見方がなされてきた。そこでは、「要素の集合」がある種の特性を創発 emergence することで¹⁰⁾、全体的な特性を獲得するような形式の議論もなされてきた。

実際、現在までの多くの社会理論が、こうしたシステムとして「社会」を捉える枠組みを採用している。そのことは、「社会の要素とは何か？」と問われた時に「個人」と答える理論が多いことによって理解されるだろう¹¹⁾。

こうした「要素→全体」論の問題点とは何だろうか。ここでは、「どの要素が全体に属するのかを決めるのは何か？」という構成論理の問題を挙げておきたい。全体に属するのを決定するのは、要素自身か、観察者(研究者)か。この問題は「どの要素が全体に属しているのか？」がいかにして決定されるのかという問題であり、「全体がどの範囲で境界づけ

られるのか？」という問題である¹²⁾。

この問題は、特に個々の個体(たとえば個人)を要素として捉える時に混乱する。たとえば、「会社」や「役所」といった組織は、それに属する個人個人が移り変わっていても全体として存続すると考えられるのは何故なのか。それは全体としての恒常性=ホメオスタシス homeostasis の問題である。また個々の要素の間の結合・結びつきが偶然的であるとすれば、ある要素が結びつけられ、別の要素が結びつけられない理由を説明できるのか。人間関係の場合には、個人の「好き嫌い」で説明できるかも知れないが、ある土地区画が1つの地域として別の土地区画と結びつけられる理由は、「全体」を構想する人間の意図を想像することになる。構成原理が不在の状況では、様々な要素の集合を「全体」として捉えることの意義さえも曖昧になってしまう¹³⁾。

この問題に「全体が決定する」という立場をとるのが「全体→要素」論と言える。

まず全体があって、全体としての特性をもった存在を生成・維持・再生産するために、個々の要素が指定されると考えることもできる。こちらが、「全体→要素」論と呼ぶ考え方である。この考えには、1つの利点もある。個々の要素を入れ替えても全体が不变であるという全体の恒常性を説明するのが容易だということだ。

1つの研究発表会が開催されているとしよう。そこで行われている発表会について、要素として「参加者」を考えることは重要だが、個々の参加者の一人一人が不可欠な訳ではなく、それぞれの参加者は居ても居なくても構わない。個々の参加者は入れ替え可能だと言える。それでも「研究発表会」という全体の意味は損なわれない。もちろんすべての参加者が居なくなれば「会」でさえなくなるが、それぞれ個々の人間に「会」としての性質が依存している訳ではないことを容易に説明できる。

これに対して、「要素→全体」論では、参加者の構成が変わった場合、「会」のあり方も変わった=異なる全体として考えなくてはならない。そうでなければ、要素によって創発した特性が全体を定義づけている以上、「ある特定の要素の組み合わせによって、創発が起きるのはなぜか」という問い合わせに答えなくてはならないだろう。それは「創発する」という特性を有しているのは、全体なのか、要素なのか、という問題でもある。

しかし「全体→要素」論にも問題点はある。それは、全体が自身を維持するために要素を産出しているのならば、全体が変化するということが起こらなくな

る、システム自体の変化の契機が失われてしまうのではないかという点である。このことを社会と個人の関係として捉えるならば、個人の側には自由度がないということを意味し、方法論的個人主義の立場と激しく対立する。私たちが行為する際に自らの側に選択肢があるという、素朴な信念にも反するようと思われる。

このように、それぞれの考えに利点と問題点があり、どちらを選ぶのかは研究者自身の選択に委ねられている。

2) 全体 totality と部分との関係

中山康雄は、「部分概念は存在論の根本概念である」と述べ、何を部分と規定するかによって、「何を対象と呼ぶか」のルールが変わり、対象の考え方方が変わることを指摘している(中山 2014: 138-139)。

ここで注意が必要なのが「部分」という概念である。形而上学においては「部分とは分割されたもの」(加藤 2014: 44)であり、その分割には「量による」分割=量的分割と、「量なしの」分割=質的分割がある。量的分割においては、量的全体ないし全体量はその諸部分のいずれの内にも存在しないが、質的分割においては全体の性質が部分にも普遍的に存在している。全体を分解したものを「断片」と呼ぶならば、断片には全体の性質を受け継ぐ断片=部分と、ただの断片がありうるのである。

ここで、空間的な全体一部分関係というのは、量的分割であるのか、質的分割であるのか、という問題が浮かび上がってくる。ここで考えてみたいことは、(人文地理学にとっての対象としての)地域について、「小さな地域がいくつか集まって、より大きな地域を構成する」と考えられるのかという点についてである。この問いは、別の見方をするならば「地域は、質的分割が可能なのか?」と問うことでもある。

この時に問題となっていることは、「小さな地域がいくつか集まって、より大きな地域を構成する」という考えが、大きな地域を分割した場合に、そうして生まれる断片が同じように「地域」と呼びうる対象であることを意味していることである。このことは、地域と呼びうる対象がある種のメレオロジー mereology 的な階層構造を持っていることをも意味する。部分としての地域と全体としての地域の間に、階層関係が成り立つと考えられている訳である。スケールの問題が考えられるのも、こうした事情によるかも知れない。

一般に、1つの地域が、いくつかの構成要素に分

解できることと、1つの地域がいくつかの部分的な地域によって構成されるのかどうかは別の問題である¹⁴⁾。たとえば、1つのコップの中の水は、いくつかの容器に分割したとしても「水」と呼べるものである。しかし一人の人間が手足や頭、胃や心臓によって構成されているからといって、それらの断片は「人間」とは呼べない。これは、ある対象がどのような存在であるかという問題であるとともに、その対象についての分割がどのような性質を持っているのかという問題でもある。果たして、地域の分割は地域を生み出すのだろうか。

もし仮に「地域」が部分的な地域に分割可能であるならば、そこに地域の「全体一部分」関係が想定されることになる。全体としての地域と部分としての地域の間に、どのような関係・構造—相互作用や階層構造—を考えることができるのかという問い合わせが開かれることになる。

普通、「1つの地域は、その内部が部分的な地域で構成されている」と考えることは不思議ではない。1つの地域の中に、それ自身が「地域」だと考えられる部分を持つという発想は、何か違和感を抱かせるようなものではないだろう。

これまでのところ、「地域」について「分割可能／不可能」の境界線は明示化される形で表現されてはいない。では、「どんなに大きなものでも、どんなに小さなものでも地域と呼ぶのか?」と問い合わせならば「そうではない」と答える研究者が多いのではないだろうか。この状況は、地域についての「分割可能／不可能」の境界線が、不文律として機能していることを表現している。「定義が存在している」とは言われないが、自由な定義を許さない—常識的な定義が存在している—状況があるのである。

「地域が部分を持つ」場合、地域が無限分割可能なのか、それとも「最小単位」としての「地域の原子」を持つのか、という問題を議論することが可能となる。地域が、分割可能な対象で、なおかつその規模に明確な設定が見られないようなものである時、地域から微小な部分を差し引くことを繰り返すことで、砂山のパラドックスと同じような状況が引き起こされることになる。この解決策として考えられるのが、「地域の定義の中に、地域と認められる規模の最小単位を規定する」ことや、「地域から微小な部分を差し引くことができないように、地域の定義を考える」ということになるのだと思われる。

こうした論理的な課題が、「地域は部分としての地域から構成されている」とする考えには残されている。その解決は、研究者それぞれの立場によって

異なるだろう。しかしそのような立場に立つとしても、こうした課題は無視していいものではないようと思われる。

2 「全体としての地域」の諸相

このようにして、全体一要素関係、全体一部分関係を基軸とすれば、大まかに4つの立場を想定できることになる（図-1）。伝統的に地域は、図のI（あるいはIII）の領域に存在するものと考えられてきた。1つの地域としてのまとめりは、個々の地表の区画の集まりによって成り立っており、そうした区画の中には「サブ地域」とでも呼べる別の地域が含まれており、地域は階層構造を成している。こうした形で地域を想定することは、ここまで見てきたような、いくつかの理論的な前提にコミットしている。

		全体一要素関係	
		要素→全体	全体→要素
全 体 — 部 分 関 係	部分が ある	I 伝統的地域観	II
	部分が ない	III	IV

図-1 地域のあり方

それは、全体と要素の関係として全体は要素の集合(それと各々の要素の間の相互作用の集合)として表されるという前提、全体と部分の関係として1つの地域の中には別より小さな地域が含まれうる(そして全体としての地域も更なる大きな地域の一部となりうる)という前提、などである。こうした前提是、1つのまとめを空間的対象として描くことに由来している。もちろん、空間的対象あるいは空間領域は物質的対象を伴い、全体一部分関係が成り立つことが自然なようと思われる¹⁵⁾。

こうした理論的前提は、必然的に成立している前提ではない。むしろ人間の「視覚」に深く依存する前提である。物質的対象と空間領域を結びつける、目に見えるような中間的サイズの「物体」の存在が、地域を地表の区画や建物、人や移動体(あるいはこれらの複合体)として把握しようという考え方の背景にはある。しかし、こうした目に見える物体の構成する世界が世界の「真の姿」を写し取っているかどうかについては、まだ検討の余地が残されている¹⁶⁾。

これに対して、従来までの前提に囚われない考察の可能性が図-1以外の領域にはあるかも知れない。以下では、こうした可能性を探ってみたい。

IV まとめ

ここからは、これまでの想定と異なる地域のあり方を探ってみたい。ここで想定しているのは図-1のIVの領域において地域のあり方を考えることである。これまでの想定とは逆の発想が、論理的に破綻したものであるか確認してみたい。そうすることで、私たちの想定の可能性が拡げられると考えられる。

私たちは、自らの調査対象について、ある時点での分析対象とそれから5年後の分析対象と同じ対象であると考えて比較したり、複数の研究者が1つの同じ分析対象について議論したりすることができる想定している。この時、私たちはその時々によつて異なって見えているかも知れないものについての同一性を問題としている。

時系列的に比較できることは、その間に構成する人や建物の数が変化するのに、それを同一だと認めることができるということで、「地域=物質」説による物質的構成という点から考えれば奇妙なことである。また、複数の研究者間での比較ができることは、それぞれ依って立つ視点・観点が異なり見ているところも異なるのに、同一だと認めることができるように、「地域=規約」説に異論を差し挟むものである。私たちの行う具体的な実証研究は、「地域=物質」説や「地域=規約」説という、方法論的原則に厳密には従ってはいないのである。そういった意味では、これから検討しようとしているのは、具体的な実証研究を可能とするプラグマティックな地域概念を明示化することでもある。

1 問題の所在

ただしここで考察してみようという問題領域について、未踏の領域ではなく、導きの糸が用意されている。それは、ニクラス・ルーマン Niklas Luhmannの社会システム Soziale Systeme についての考え方である。

ルーマンは、従来の社会学においては「伝統的には常に、「社会は個々人から成り立っている」ということが出発点とされてきた」(ルーマン 2009: 5)とし、こうした考え方の背景として、社会を「外側から観察することができる何ものかとして考えたい」という願望と関連しているのではないか」(ルーマン 2009: 18)と指摘している。外側から観察することができるものとして考えるために、全体やその内部にあるものを個人や領土・領域といった目に見えるものによって捉えようとしているのである。しかし、この前提が誤りを含んでいると考え、ルーマンは独

自の社会システムについての概念を整理する。

ルーマンは、社会が具体的な個人=人間にによって形成されるとする社会概念を、人間中心主義的なものであると批判する（ルーマン 2009: 16-17）。こうしたルーマンの考える社会システムは、当然ながら、個人や領土・領域といったものから構成されてはいない。ルーマンは、「コミュニケーションを前提とするコミュニケーションというオートポイエティックな作動によって、全体社会が生じてくる（ルーマン 2009: 60）」とするのである。ルーマンは、社会を生産・再生産する作動を「コミュニケーション」だとする（ルーマン 2009: 65）。社会は、「コミュニケーションによってコミュニケーションを生み出していく」のであり、社会の動態は「コミュニケーションがコミュニケーションへと影響を及ぼしていくことに、その意味で、ある瞬間ににおいて実現されている区別と指示示しを〔別の区別と指示示しへと〕変換していくことのうちに存している」と説明する（ルーマン 2009: 95）。ここでは、社会を、「個人の集合」とその「領土・領域」として捉えることが拒絶されている。

同様な指摘は、ここで考えようとしている「地域」概念についても言えないだろうか。具体的で外側から観察できるものに注目し、その組み合わせとして地域というまとまりを捉えようとしてすること——ミクローマクロという関係で捉えること——は、社会の場合と同様に、「対象の正確な概念規定が妨げられてしまう」（ルーマン 2009: 11）事態を招いているのではないだろうか。

確かに、「ある社会なり集団をとった場合、ある個人が、ある社会あるいは集団に「属する」と考えることができる」（竹村 1993: 516）とすることは、自然な振る舞いのように思われる。ここで、「このような「～に属する」という表現をとる時、我々は、集合論に基づいて個人と全体との関係を問題にすることができる」（竹村 1993: 516）として竹村和久は、ミクロ現象（個人）とマクロ現象（集団）との関係を「ミクローマクロ問題」として捉え、ZF集合論に基づきながら検討している¹⁷⁾。そうした検討を通じて、社会 A を個人 x_1, x_2, \dots によって構成されるものと前提した場合、ZF集合論に基づく限り、「個人と集団」とが集合として全く交わりを持たないことを意味しており、個人の集合と集団の集合とは互いに全く異なる集合であることを意味している（竹村 1993: 523）という結論を導いている。個人の集合は、集団の集合の部分集合としては成り立たないのである。それだけでなく、個人と集団の間に何らかの関係を

考えることはできるが、そうした関係の存在は個人と集団という論理体系の中では証明されないものであることも指摘している（竹村 1993: 523）。これらの問題提起は、集合論という公理系に基づいて提出されているもので、論理的問題として重く受け止めなくてはならないだろう。こうした竹村の論証の真偽の検討は残されているとは言え、個人と社会の関係をミクローマクロ問題として描くことが論理的に解決することが難しい問題を突き付けてくるのならば、地域と個人あるいは地表の区画との間のミクローマクロ問題も同様の困難を抱えているとも考えることもできるだろう。

2 導きの糸

では、こうした問題を克服しようとするルーマンの捉える対象としての「社会」あるいは「システム」とはどのようなものだろうか。

ルーマンは、「システムは、環境への差異を生み出して維持することを通して、自身を維持する」のであり、「差異は、自己言及的な作動の機能的前提」であり、「環境への差異がなければ、そもそも自己言及は存在しないだろう」と指摘する（ルーマン 2020: 33）。この意味において、絶えず環境への差異化を行うこと、境界を維持することは、「システムを維持すること」に他ならない。ここで「境界」は物理的な境界を指しているのではなく、システムにとっての「自己／非自己」の区別の境界である。なぜなら、あるシステム A の環境とは、システム A の外界や外部を意味するのではなく、システム A の否定としての補集合 $\neg A$ を指すからである。

ルーマンはシステムの要素について、「システム自身が、そのシステムを作り立たせている要素を、要素として特質づけるのである」（ルーマン 2020: 40）と述べる。このことは、「要素は最終的に実体としての、存在論的な性格を持つ」（ルーマン 2020: 40）という伝統的な考え方とは異なっている。ルーマンは、システムを具体的に目に見えるものとは捉えず、当然ながらその要素も目に見えるものとは考えない¹⁸⁾。ルーマンは、社会システムを生産・再生産する作動=社会システムの要素を「コミュニケーション」とする。このことは、コミュニケーションを個人に帰属させることができるものだという考え方とは異なる。コミュニケーションを、個人 a と個人 b との間で行われる行為だと考えることは、社会システムに「個人」を招き入れてしまう。

これまでにも「静的なシステムから動的システムへ」、「閉鎖系から開放系へ」、「平衡系から自己組織

系へ」、「線形的システムから非線形的システムへ」など、新たなシステム像に関する様々なアイデアが提出されてきた。しかしこれらのシステム像は、依然としてシステムを「外側から観察することができる何ものか」として捉えているのではないだろうか。このことは、私たちにとって「対象objectをシステムとして見る」という——対象を客観的で実体的なものと想定する——視点があまりに自然なものであることを反映している。これに対して、「外側から観察することができる何ものか」として捉えないというルーマンの戦略は、不自然さが感じられる。

従来のシステムに対する考えは、システムの内部と外部との問題を、ある具体的な物理的空间の領域の内部と外部という形で提示してきた。システムの要素は必然的に、物理的領域の輪郭の内部に、同じく物理的輪郭をもつものとして存在すると考えられてきた¹⁹⁾。システムにおける相互作用とは、こうした物理的輪郭=境界を跨いで形成されるものと捉えられてきた。このように思い描かれるシステムにおいては、「(システムの)構成要素をどのように決定するのか」という構成の問題 problem of construction と、「(システムの)内部をどのように規定するのか」という帰属の問題 problem of attribution が一体となって生じる。特定の物理的領域をシステムとして確定するとその内部にはシステムの機能・構造に関係するものと関係しないものが存在するように見えシステムの構成要素を特定する論理が求められ、システムの機能・構造に関係する具体的な要素に着目するとシステムを特定の物理的領域として提示することが困難になる、システムを内部と外部とに区切る論理が(システム概念とは別に)求められるというジレンマに陥る²⁰⁾。そうした状況の下では、システムの物理的領域は便宜的に確定されたものとして提示されなくてはならなかった。

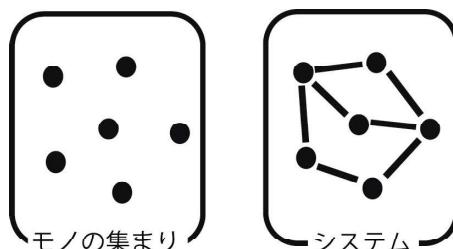


図-2 集合とシステム

1972年の『成長の限界』の著者でもあるドネラ・メドウズは、「システムとは、何かが集まったものです」(メドウズ 2015: 18)と説明している。こうした説明

の中では、「たまたま路上にまき散らされた砂」のような「何かの寄せ集め」はシステムではないとしており(メドウズ 2015: 33)、そこには「システムか単なるモノの集まりか」(メドウズ 2015: 36)として表現する、図-2のような区別が見られる。システム思考での分析では、システムを探すときには、システムの要素を探し始め、要素の分解が行き過ぎる前に、要素をつなげている関係性を探し始めることが勧められる(メドウズ 2015: 35)。まず要素(=モノ)の存在があって、関係性が考えられるという手順が想定されているのである。こうした視点は、観察される現象を捉えようとするシステムの一般的規定を「交互に作用する要素の複合体」(ベルタランフィ 1973: 89)とするベルタランフィにも見られるように、観察される対象を「システム」として捉えようとする考え方の中で共有されていると言える。これまで「全体は部分の総和を超える」や「個々の要素には還元されない全体の特性」といった説明がなされてきたが、こうした説明がなされる際には、最初に観察可能な部分や要素が求められ、そこに関係があることは除かれていた。関係の総体をシステムだとしながらも依然として部分あるいは要素に第一に注目しており、関係をシステムの構成要素とみなすような視点を欠いていたのかも知れない。

こうしたシステムの実体論的な方角は、一方で「システムとは一言で言えば関係の総体である。関係によって結ばれている実体が時間的に変化しようと、関係それ自体に影響を及ぼさない限り、システムとしては不变である」(村田 1977: 127)とされるように、関係の総体がシステムであると説明されてきたあり方と食い違う。そこには、まず観察可能な何ものかを捉えようとする想定の影響力の大きさが表れている。

近年、一部で提唱されている「関係論 relationalism」的視点、あるいは「関係論的思考 relational thinking」によれば²¹⁾、私たちに「実体」として見えているものも関係的に構成されているのであって、自律した／自明な○○は、関係としての効果であるとされる。空間的な境界についても、「外から与えられた境界の内部で諸要素が関係するのではなく、内側の諸関係の動態によって一時的に境界づけが可能な状況が生みだされる」(久保 2019: 28)として捉えられる必要があるのである。

こうした関係論的な考えには、あまり言及されないが、二つの極の間での、広いグラデーションが存在している。この二極は「関係的に構成されている」という主張の捉え方によって区別されるが、一方

を「関係的に構成されている」ことを「関係以前に実体・本質は存在しない」という存在論的命題を含むと捉える強い主張——ここでは仮に「存在論的関係主義 ontological relationalism」とする——と、他方を「実体の構成する全体は、関係づけられたものとして見られなくてはならない（理解されなくてはならない）」というより弱い主張——仮に「認識論的関係主義 epistemological relationalism」とする——とに区分けしてみよう。

従来からのシステムへのアプローチは、関係論のより弱い主張となっている。これに対してルーマンの社会システムは、「要素は最終的に実体としての存在論的な性格を持つ」と考えないという点で強い主張を含んでいる。このように、「システム」として対象を分析しようとする場合にも、関係論的思考と同様の二種類の主張を含んでいることが分かる。こうした関係論的思考への言及の中で、ルーマンが参照されることは決して多くはない²²⁾。したがって、ここでシステム理論に基づいて考えることは、近年の関係論的思考に対する、ある種の貢献となる可能性もある。

ルーマンの主張するように、システムを「外側から観察することができる何ものか」として捉えないということは、数的・量的な大きさ scale・規模 magnitudeでは表現できない対象についての記述方法を模索しなければならないことを意味している。私たちに「実体」として見えているものの関係的な構成を把握するために、見えているものを利用できないという事態がそこにはある。こうした記述方法として、「化学反応において観察できるのが反応している化学物質だけで、その物質を変化させている働きそのものは観察できないように、作動、働きであるシステムそのものを観察することはできない」（山下 2010: 62）ということを前提とするオートポイエーシスの考え方は重要である。山下和也が述べているように、「オートポイエーシス・システムはいかなる手段によろうとも直接に観察することができない」（山下 2010: 62）ものである。「オートポイエーシス・システムは閉域形成によって、自分ではないあらゆるもの自分自身から切り離すことで実現する」（山下 2010: 31）が、その際に人間という存在も「システム／環境」の区別の中で切り離される。

このように考えれば、オートポイエーシスの考えを社会システムに用いたルーマンの発想は、「地域」概念を「外側から観察することができる何ものか」として捉える以外の道を探そうという、ここでの試みにとって導きの糸となるのかも知れない。

3 可能な定義

では、ルーマンが「社会」について用いた手法を、「まとまりとしての地域」に対して用いることはできるだろうか。ここでルーマンに依拠することは、ルーマンの社会システムの考え方を「地域」について移植するのではなく、ルーマンの発想の源泉となった視点に基づいて「地域」を考え直すことを意味している。

「社会」の場合と同様に、「まとまりとしての地域」の「まとまり」を創り上げているのは、「人々の集まり」や「境界づけられた領域」の存在としての実体だと考えることは適切だろうか。確かに、我々は実際の場面で様々な「個人」や、様々な「地表上の区画」の存在を目にしている。しかし、社会を成立させる上で個人と個人を結びつける相互作用が重要であるように、様々な地表の区画を結びつける作用や、個人と地表の区画を結びつける作用が「1つのまとまり」を産み出しているとは言えないだろうか。

ここでは、こうした「まとまりとしての地域」を構成する作用を、とりあえず「位置づけ positing」と呼んでおくことにしたい。こうした作用は、事実上、ある地域をそれ以外の何ものかと区別する作業を意味している。様々な区画と区画、区画と人々を結びつけるということは、ある「まとまり」に属するものと、そうでないものを区別することであるはずだからである。

こうした作用は、現実の具体的な出来事としては、「境界を引く」とか、「自らをある地域の内部だと見なす」とか、「ある出来事を、地域に関連するものとは見なさない」などといった形で現れるだろう。「○○に遊びに行く」とか、「○○は、明るい街である」といったものも、その「○○」について「境界を設定する」、あるいは「ある性質を区画に結び付ける」といった内容を含む作用として考えることが可能である。

以上のようにして仮定した、「まとまりとしての地域」の性質を確認してみる。

ここで仮定したのは、「位置づけ」という「自己／非自己」の区別——これも一種の相互作用であるが——を用いる、プロセスが作り出すシステムとしての「地域」である。こうした「地域」の構成要素は、「自己／非自己」という区分を用いて自己をまとめる事であって、地表上の区画やそこに住まう人々、建物などではない。具体的に考えてみると、ある対象について、ここで言われるような「地域」として把握しようということは、その対象へと何かを結びつけようとする作用、そしてその地域を他のものとは異なるものとして区別しようとする作用を包括的に捉えようとする事になる。それは、「1つ1つ

の作用が……」ではなく、全体として「1つのまとまり」と、それ以外とに区別することを意味し、そこに全体を見通すことも困難な、曖昧で未確定な境界を設定する。そこに存在するのは、日常的に繰り返される実践の束であり、個々の「自己／非自己」の区別によって生み出される様々なレイヤーでの区別の重なりであって、何か確定した境界線を前提とした作用ではない。こうした作用を、「内部と内部の間で作用するもの」や「内部と外部の間で作用するもの」として捉えることは不適切である。

こうしたシステムとしての「地域」のあり方は、人や区画、モノといった雑多な素材が寄せ集められたものではなく、それぞれは「何を」あるいは「どのように」という点で結果は異なるかも知れないが、区分しながら「1つのまとまり」へと位置づけていく「作用」という単一の構成要素によって構成される集合となる。

ここで仮に「位置づけ」と呼んだ、区分しながら「1つのまとまり」へと位置づけていく作用について、さらに理解を深めていきたい。

「位置づけ」という作用は、各地域が「自己」と「それ以外」との区分を行うという意味において、1つの対象を「まとまりとしての地域」と捉えることと独立には存在しないものである。ある対象を1つのまとまりとして捉えるという条件があつてこそ、「自己」とそれ以外との区分は可能であり、「自己」とそれ以外との区分が存在するからこそ、統一された1つのまとまりが捉えられるという自己言及的な関係がそこにはある(図-3)。そこでは、個々の位置づけによって生み出された「自己／非自己」の差異が、それぞれは微妙に異なりながらも、無数に蓄積され、こうした蓄積の全体が1つの差異となり、まとまりとして参照されている。決してあらかじめ決められた単一の差異を生産する過程が位置づけを表しているのではないが、その集合全体として単一の「自己

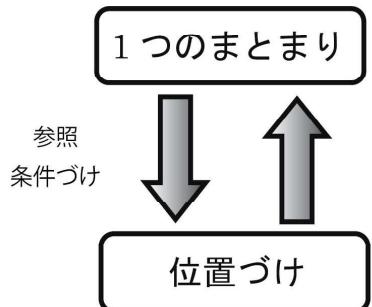


図-3 作用と全体の関係

／非自己」の差異として作用するものとして捉えられる。

ここまで述べた「システムとしての地域」のあり方を、それが最終的に正しい形であるのかはまだ分からぬが、概念的な形で素描してみよう。

私たちが目にできる世界には、様々な建造物や自然物が存在し、そこに暮らす人々が居る。そこでは、そうした対象たちが様々に関係し合ふことで、境界が引かれたり、看板が立てられたり、個々の対象が関連付けられたり、引用されたりするというような、様々な社会的な作用が生み出されている。こうした様々な作用は、私たち人間から見た時には「関連の連鎖」として存在しているように見えるだろう。こうした関連の連鎖は具体的で、多様な作用の集まりではあるが、それ自体は具体的であるがゆえに地域の「自己と非自己を区別する差異」ではない。これらの具体的な作用の中から、更に「その地域である」と「その地域ではない」ということに関する差異が次々に取り出され、こうした「自己／非自己」という差異の集合が、次々に「自己／非自己」の差異を生み出す「システムとしての地域」として成立しているのである。

こうした「システムとしての地域」は、具体的で多様な、関連づけを伴う社会的な作用の集合——これは具体的な出来事の集合と言えるかも知れないが——がなくては存在しないが、それとは異なる差異の集合として独立して存在するものである。これら2つの領域が成り立つことが、地域が「システム」として立ち上がるということを意味しているのである。このことを表現したのが、図-4である。

「システムとしての地域」は、存在論的違いを前提

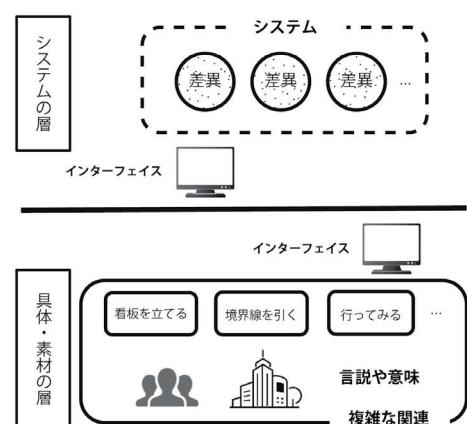


図-4 システムの構成

とした境界によって隔てられた、個々に相対的に自律した二層構造を成している。「具体・素材の層」では、人々や建造物、言説などの間で具体的な相互作用が繰り広げられ、独自の作用の連鎖を形作っている。そこでは、人々や建造物が(従来的な意味で)システムを成しており、具体的な差異化の作用として「看板を立てる」ことや「境界線を引く」ことなどが行われている。しかし「システムの層」は、「AさんがB地点に看板を立てた」というような、具体的な差異から構成されているのではない。こうした差異を、ある地域にとっての「自己／非自己」の差異を指示するものとして、「自己である」という差異の集合として抽象化したものが自己言及的システムとしての「地域」となるのである。システムの層には、差異——あるいは様々な「自己／非自己」——しか存在しない。これは、互いを自らのインターフェースを通して観察しあう存在だと考えるようなものである。システムは、その前提として、具体・素材の層で人々や建造物などが生み出す作用の無いところでは成立しない。しかし「AさんがB地点に看板を立てた」という具体的な作用自体に立脚しているのではなく、その具体的な形態が「CさんがB地点に看板を立てた」でも「DさんがE地点に看板を立てた」でも構わないというような形式で、差異を利用していけるのに過ぎない。同様に、システムの用いる差異の構造を参照する私たちの具体・素材の層での出来事の生成も、システムの与える条件に完全に拘束されるものではない。このことは、別の表現を用いるならば、具体・素材の層はシステムから見た場合に環境に位置づけられるものであって、システムはその内容に関与しないからだということを意味している。具体・素材の層とシステムの層との間では、互いの層の要素が——多くの場合、縮減されるだろうが——何の変換も受けずにやりとりされることはないのである。

4 小括

ここまで考察を加えてきた「まとまりとしての地域」のあり方について、何が言えるだろうか。

この小論において考えてみた「まとまりとしての地域」は、①観察可能な物的存在ではなく、作用を要素とする全体であり、②全体が1つのまとまりとして存在し、質的な部分に分割できない存在である、と仮定して構想されたものでした。その結果、③様々な作用が全体を参照しながら、地域に関する「自己／その他」の境界を生み出し、④構成要素と全体とが自己言及的な関係にあるような存在を成している

として、「地域」を考えることができた。

「作用を要素とする全体」と言うと、何か実体があるものではないように感じられるかも知れないが、こうした全体は個人や地図の区画、建造物といった存在に還元できないものである、1つの説明水準を持っているということも意味している。また、質的分割ができない存在だとみなすということは、1つの「地域」を壊すことなく説明するためには、その「地域」が成立している水準で説明を行わなくてはならないことを表わしていると言える。さらに、地域を形成している作用が、その地域に属するものか、そうでないかを境界づけながら作用しており、なつかつそうした作用と全体の関係が自己言及的な形で行われているということは、こうした「地域」は、観察する研究者の視点に依らず、自身の存在領域を自己決定するような存在であるということになるだろう。

このことは結果として、「存在の非還元性」と「視点からの独立性」という、冒頭において仮定した「実在」に関する基準を2つとも満たしていると言える。1つの「地域」を論じる際には、様々な作用の集合という全体のレベルにおいて論じるしかないのであり、こうした1つの「地域」は、あくまで作用の全体がどのような境界を設定しているのかが問題であって、特定の観察者の境界設定によって決められる対象ではないのである。このようにして、「まとまりとしての地域」を全体として論じることで、「地域は物質である」という論理に頼らなくとも、「地域は実在する」ということを導き出せる形となる。作用を要素とする全体としての「地域」は、実在すると言うことができるのである。

ここまで「全体—要素」関係と「全体—部分」関係で図に基づいて考察を進めてきたが(図-1)、この2次元の分類の内容について議論すれば満足だという訳ではなく、システムとしての「構成要素」や、全体を形作る「断片」や「部分」を、どのようなものとして考えるかという点で、様々な条件設定が必要であったことが理解できる。

この点について、ここで言及した点を挙げてみると

- 1) 「実在」を、物質的存在にだけ限定して捉えるのか、それとも物質以外のものにも実在性を認めようとするのか
- 2) 「地域」を、それ自体を実在するものとして捉えようとするのか、それは実在ではないと考えることにするのか
- 3) 「地域」を論じる上で、要素が先行するという考え方を用いるのか、全体が先行するという考え方を

用いるのか

- 4) 「地域」について、質的分割という意味での部分を認めることにするのか、そうした質的分割を認めないのか
- 5) 「地域」については、要素と部分あるいは断片は一致すると考えるか、要素を部分あるいは断片と異なるものと考えるか

などといった条件の複合したものとして考えたことになる。

この小論では、こうした条件についていくつかの立場を示したことになる。ここでは5つの選択肢を示したが、それだけでも32通りの選択がありえる。ここで述べられていない選択肢も考えるならば、その選択は無数になるかも知れない。しかしこうした選択肢を提示することは——ここでの選択が間違っていたとしても——論点を分かりやすく提示し、多くの参加者を議論に呼び込むことを可能にするはずである。この拙い小論に意義があるとすれば、そうした点だろう。今、問い合わせは開かれたのである。

V 蛇足

ここまで、「地域は物質である」という論理に頼ることなく「地域は実在する」と主張できる可能性を、全体 wholeness を「全体—要素」関係と「全体—部分」関係とに分離し、改めて分析し直すことによって探ってきた。その過程で、ある種のシステムとして「地域」を描き出すことにもなった。

しかし、こうしたシステム描写に関しては批判があるだろう。そのような批判は様々だろうが、「なぜ二層構造が必要なのか」という疑問もあるだろう。このことについて、多少スペースを割いて弁明しておきたい。

今回、システムとしての在り方を二層に分けたことにより、「具体・素材の層を観察していれば、全てが理解できる」という発想には原理的に立てないこととなる。ここで問題は、「それでも、私たちは具体・素材の層を観察することしかできない」ということである。しかし形而上学的には、「私たちがそれしか観察することができない」と言うことと、「私たちの世界にはそれしか存在しない」と言うことは異なっている。私たちは、ここでの二つの命題——「私たちは具体・素材の層を観察することしかできない」と「私たちの世界にはそれしか存在しない」——を何の検証も無しに結びつけてはいないだ

ろうか。

これまでの社会モデルにおいても主張されてきたが、私たちが行う具体的な行為や言説、あるいは物理的な事物の(ミクロな)変化は、社会構造・社会システムの(マクロな)変化を必然的には引き起こしたりはしない。ある出来事はシステムの変化を引き起こしたが、別の出来事はそうした変化を引き起こしてはいない、ということが起こる。こうした事態をこれまで、あらかじめ意図らしい意図が存在していないことに由来する「偶然性」や、行為者には全体の文脈や関係をすべて把握することが困難であるという「情報の不完全性」によって引き起こされる、行為の「意図せざる結果 unintended consequences」という説明に求めてきた²³⁾。同様に、ある地域が存在しているとして、そこでビルの建て替えや個人の買い物行動といった目にすることのできる変化は、地域としてのまとまりの在り方を必然的に変化させるものではない。建造物の変化や、人の行動の変化という個々の出来事それ自体は、システム自体の変化の十分条件とはなり得ない。しかし私たちの観察によれば、人や建物、人々の行為や言説が存在しないところに、「社会」や「地域」が存在するようにも思われないのである。

こうした全体の変化を具体的に観察可能な出来事に還元しようとする視点は、「システムにしても個人の行為にしても、全ては人間によって観察・記述が可能なものだ」という前提・想定に基づいているのだろう。そこでは、人間とは異なる形式で世界を観察し、世界に関与している存在があることを無視しており、世界との関わり方が人間による様式に限定されると考えられている²⁴⁾。果たして、人間による観察の正当性はどのように確保されるのだろうか。

ルーマンの社会システムについてボルフが「いかなるシステムも現実に直接アクセスすることはできない——より正確には、システムはつねに、観察用の区別を通じてのみ現実にアクセスする」(ボルフ 2014: 135)と述べているように、システムは自己の用いる区別を介してしか現実にアクセスするすべを持たない。ルーマンの社会システム(あるいはオートポイエーシス)の考えに従うならば、世界は自らの基準で観察する様々なシステムによって構成されているという世界像が成り立つのである。そこでは、各々のシステムがどのような基準によって観察を行っているのかに基づいて、各々が独立したシステムとして対象は観察されなければならない。

こうした意味では、今回ここで提示したモデルでは、具体・素材の層での出来事がシステムの層の変

化の十分条件とはならないことだけでなく、その逆のシステムの層の変化が具体・素材の層の出来事に拘束的な影響を与えないことについての、論理的な説明が可能である。なぜなら、互いの層の間はインターフェースによる観察による関係があるだけで、互いの要素が直接的に行き来するような形になっていないからだ。互いの層の行う観察・記述は、自らの依拠するインターフェースを通した観察に由来する縮減の影響を受ける。どのような縮減を受けるのかは、その層がどのような構成要素によって成り立っているのかという存在論によって原理的に決まる。存在論的に存在を許されていない要素が、そのシステムの内部世界に存在することは許されないものである。

このことは、これまであまり真面目に検討されなかったかも知れないが、実は当たり前のこととして行われてきた区別である。私たちは、ある「意味世界」について考える時、その世界に存在しているのは「意味」だと思っている。そこでは、モノも意味の姿をとつて現れている。それは、私たちが、自分の意識世界の中に直接モノを投入することができないことに同じである。「世界が存在論的に切り分けられている」ということは、それぞれの世界の構成原理としての存在論的条件によって、その世界に存在できる要素が限定されることを示している。観察によって知覚できない対象は、あらかじめ存在していなかつたのではなく、観察によって見えていないのだ。

1つの地域としてのシステムは、自らのインターフェースを通じて世界を観察し、自らの内部の要素として差異を取り込んでいる。そうした取り込みは、単純にイメージされるような、システムの外部からシステムの内部への項目の移動ではない。システムの外部は、システムの内部とは存在論的に異なる構成によって成り立っているために、システムの外部の要素がそのままシステムの内部に入ってくることはない。そうした取り込みは、システムの存在論に、合致する形式への変換であり、自らの構成要素の生産としてシステムに捉えられるプロセスとなる。

私たちは、「ある地域」というまとまりの中で、人々の生活や建物の変化を発見し記述することができる。それが「ある地域らしさ」を変化させていると感じることもあるれば、そうでない場合もあるだろう。我々がそうして感じる「ある地域らしさ」は何故あるのかと問うならば、今回のモデルでは、それはある地域が地域としてまとまりを維持するシステムとなつておる、そこでは自らを確定する差異が働いているのだが、そうして生み出される地域をまとまり

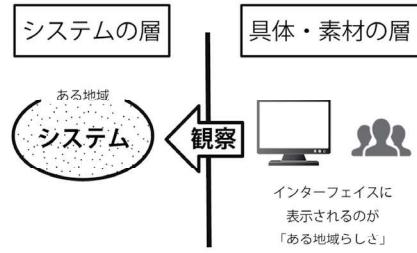


図-5 まとめの把握

として存立させる何ものかが、「具体・素材の層」の住人である私たちは「ある地域らしさ」として観察されるのだ、ということになるだろう(図-5)。こうした論理は、それを観察する人々が、相互に異なる「ある地域らしさ」を感じることを説明可能にするものもある。ここに、何か不变で一貫した「ある地域らしさ」を想定すること——「ある地域らしさ」の内容を一組の記述に限定し、その内容が異なることを「ある地域らしさ」の変化と見なすこと——は、システムの柔軟さを考慮に入れないものである。前述したように、システム自体が何を「ある地域らしさ」として利用しているのかは「具体・素材の層」から観察する私たちは決定できない。それを「具体・素材の層」での言葉として翻訳したものが、実際に私たちの感じる「ある地域らしさ」である。私たちは、こうした「ある地域らしさ」が同時代にも複数存在し、それが観察する人の置かれた場によって違つていることを把握するが、こうした多様性を越えて「それでもある地域らしさがある」と言えるためには、個々に見え方の異なる「ある地域らしさ」の背後に同じ対象としての何かが実在していると考えることに意味があるのである。それは、観察している人によって「正方形」に見えたり「長方形」に見えたり、「三本足」に見えたり「四本足」に見えたりしていても、そこに「机がある」とそれぞれの観察者が言うならば、各々の見えを超えた「机」が実在していると考えることと同じである。このことは、私たちの日常感覚からみて、(論理的に)突拍子もないことを主張している訳ではない。我々が、机が「三本足」に見えたり「四本足」に見えたりすることを「机が変化している」と言わないように、その時々で人々の感じとる「ある地域らしさ」の示す内容が変化することを、その背後にあるのであろうシステムとしての地域自体の変化であると見なす必要はないのである²⁵⁾。

それでも私たちは、社会を個人の集まりとして、

地域を地表の区画の集まりとして把握しようという誘惑から逃れられないかも知れない。しかし、社会を個人の集まりとして、地域を地表の区画の集まりとして捉えようすることは、それらを単なるモノの集まりに還元可能だとする唯物論的誤謬に陥る危険があるだけではなく、「関係に注目する」としながらも、関係に世界を構成する要素としての資格を認めないものである。「関係に注目する」、「関係が重要である」と言い続けながらも、私たちは「関係」が何であるのか——何らかの第三項であるのか、世界の中に位置を持つ存在者なのか、分析上の仮構なんか——について語ってきてはいない（林 2021: 278）。仮に人文地理学が関係論的な思考を目指すのであれば、本質主義と還元主義へと結びつく理路を切断するだけではなく、極端な相対主義を探ってニヒリズムに陥ることを回避する方策を模索しなければならないだろう。そのためには、目の前にある存在・素材を用いて世界を設計し組み立てるのではなく、本質主義と相対主義を同時に迂回することを可能にするものとして世界を想像／創造し直さなければならぬのかも知れない。

付記

この小論は、2020年11月28日(土)の第138回地理思想研究部会(オンライン部会)における発表、「地域は物質である」は人文地理学にとって妥当な定義なのか?——地理学方法論への一考察、の内容を元に書かれたものである。ここで具体的な名前を挙げることはしないが、発表時にコメントや質問を頂いたコメントテーザーや質問者の方々には、そのコメントや質問を反映したものとは言えないかと思いますが、様々なご教示を頂き感謝致します。また、その後のメール雑誌『空間・社会・歴史』での検討に参加してくれた読者の方々にも、そうした励ましがなければ完成させることができなかつたと思われる所以、この場を借りて感謝申し上げます。

注

- 1) 「砂山のパラドクス」は、境界条件の曖昧さによるパラドクスである。前提としてある巨大な砂山があるとして、それは莫大な量の砂粒によって成り立っている。まず、1粒の砂粒を取り除くことを考えるならば、1粒を取り除かれたからといって依然として元の砂山は砂山のままである。次にもう1粒の砂粒を取り除いたとしても砂山である・・・といったことを繰り返していくと、最後にはどんな小さな砂の集まりも砂山であることになってしまふが、それは我々の日常的な意識とは異なる。同様に、

地域を成立させる切片に制約が無いとすると、極小規模の切片を取り除いても地域は地域のままということになり、最終的にどんな小さな空間であっても地域と呼ばなくてはならなくなる。逆に地表の極小の区画を地域と呼ばないならば、極小の区画を2つ合わせても地域とは言えないことになり、極小の区画の集まりは地域ではない・・・という形式で我々の目にしている地域もすべて地域ではなくなってしまう。これは、「砂山」と呼べる境界を規定しなかったことにより、「すべてが砂山と呼べる状況」と「すべてが砂山と呼べない状況」がどちらでも成立してしまうという困難である。これを回避するためには、研究作業上の現実問題として地理学では畳一枚分の空間を地域とは呼んでいないように、最小の地域の規模・スケール=「地域の原子」を想定するような論理が必要とされる。

- 2) なお、ここでの指摘は、地域を対象として具体的に実証研究を行うことを「反省的ではない」として批判するものではない。「実証研究論文としての完成度を高めようとすればするほど、その実証研究の内部の視点をとらざるを得なくなり、研究アプローチに関する言及という実証研究の外部的視点をとることが、ほとんど不可能になる（竹村 1993: 515）」という個別の事情を考慮しなくてはならない。したがって本稿では、「内部的視点をとりつつも外部的視点をとる」というようなメビウスの帯のような論評の仕方は、ほとんど不可能である（竹村 1993: 515）」という前提に立ち、一般の人文地理学者にとっては外部の視点に立って、具体的な事例を指示すことなく概念的検討を加えていくことになることをお許し願いたい。
- 3) こうした物質的構成の考え方は、具体的な部分・要素が物質であることによって全体が物質であること、そして実在であることを主張しているだけでなく、全体の存在とは独立に部分・要素が存在しているという主張にもコミットしている。そこでは「地域」として捉えられる前から地表や建造物の存在は確保されている。また物質的構成の考えは、モノとモノとの間に成り立っている「関係」を1つの存在者として認めない立場でもある。
- 4) 「地域の同一性」問題は、「著者」にとっての同一性の問題として一人の著者が何を同一と考えるかという著者の論理の一貫性を問うものと、複数の研究者間での比較の可能性を問う同一性の問題の2つの問題として考えられる。一人の論文著者が、その時々で「地域」という表現を様々に用いることは、そこで論じられている「地域」が同じ対象を表現していると考えられるのかという問題を提起する。複数の研究者間でも、1つの「地域」という用語の使用が同じ対象を表現しているのかどうかは、比較という研究実践の可能性を問うことにつながっている。
- 5) 一般に「物質は実在する」を真と考えることは正当である。しかし、この命題の二重否定「物質でないものは、実在ではない」が真であるかは、「物質だけが実在する」と考えるかどうかによる。このためここでは、一般に「物質は実在する」という想定だと考えられる内容であるが「実在するのは物質だけである」と強めの表現を用いている。

- 6) 唯物論 materialism は「精神的なものよりも素材的なものをより根源的であると見なす世界観的ないし認識論的な立場」(廣松他 1998: 1616) とされる。こうした意味では、観念論に対立する用語である。地域を地表の区画や建物、人など——その関係や機能、意味などを除いて——の集まりと見ることは、機械論的唯物論の立場に近いだろう。
- 7) 現象主義 phenomenism は「実在物とされているものは実は感覚や知覚という現象の集合にほかならないとする考え方」(廣松他 1998: 465) であり、経験主義的な方法を徹底したものである。英國経験論を代表するジョージ・バークリーに始まり、デイヴィッド・ヒュームにおいてひとつの哲学的立場として完成した。現象主義は意識内在主義の立場を取り、世界および自我を「知覚現象の束」として説明する。
- 8) こうした様々な水準において独自に存在論が成り立つことは、「存在すること＝何らかの意味の場のなかに現わされること」(ガブリエル 2018: 97) とするマルクス・ガブリエルの存在論にも見ることができる。しかし意味の場において現象することを「存在すること」の基盤に置くガブリエルの議論に対し、説明が十分に満足するものとして与えられるのかという点から所与性を吟味する本試論での議論はまだまだ稚拙ではある。またガブリエルは、「ほとんどのものは、たんにわたしたちには気づかれずに現象します」(ガブリエル 2018: 103)ともしており、人間の認知・心から独立した対象がありうるということをも含意しているようだが、以下でも示すように、本試論ではそうした想定は置いていない。
- 9) 倉田剛は、【心からの独立性テーゼ】として「Xは実在的(real)であるならば、XおよびXについて成り立つ事実は、私たちのXに関する表象(Xに関する心的態度、Xに関する概念・理論など)から独立して存在する／生じる／成立する」(倉田 2020: 50-51)を挙げている。倉田は、貨幣や国家といった社会種 social kind の実在を論じる中で心からの独立性テーゼを「形而上学の根本的区分の基準としてはまったく不十分」(倉田 2020: 53)と論じている。
- 10) 創発とは、『広辞苑 第七版』では「進化論・システム論など複雑系の理論の用語。生物進化の過程やシステムの発展過程において、先行する条件からは予測や説明のできない新しい特性や能力が生み出されること」(新村 2018: 1697)とされ、『複雑系の事典』においては「自律的に振舞う個(個体や要素など)間および環境との間の局所的な相互作用がマクロ的な秩序を発現し、他方、そのように生じた秩序が個の振舞いを拘束するという双方向の動的過程により、システムに新しい機能、形質、行動などが獲得されること」(『複雑系の事典』編集委員会 2001: 216)という定義が採られている。一般的に言えば、部分の性質の単純な総和にとどまらない性質が全体として現れることである。しかし、こうした表現は曖昧さを残している。たとえばジョン・アーリは『グローバルな複雑性』の中で、「ジャンボ・ジェットの部分部分は、信じられないほど複雑に組み合わさって連関し、「飛行機」が飛ぶことを可能にする創発特性を生み出している(アーリ 2014: 38)」として創発について語っている。しかし、こうした機械的な複合体でも良ければ、自転車でも同じである。自転車は(複雑さは低いかも知れないが)様々な部品と人間が組み合わされることで「平地をより早く移動する」という性質を生み出していると言える。こうした例は、生物進化をモデルとする創発概念のイメージとは重ならない。『生物学辞典』では項目「階層論」において「生物現象は、最終的に物理化学的法則にまで還元して説明しうるとする立場に対して、生物世界にみられる各階層には独自の法則が成り立つとする考え方。分子、高分子、細胞小器官、細胞、組織、器官、個体、個体群、社会と階層が上がるごとに、下位の階層を律する法則では説明できない現象が現れる。このように、階層が上がるごとに新たな性質が付与されることを創発(emergence)とよぶ(石川他 2010: 191)」として説明されている。のことから分かるのは、創発は自然界の階層構造を前提として、還元主義的方法への批判が込められていることである。
- 11) こうした、まず個人があつて社会が成立するという考えは、國家の正当性の契機を、契約ないし市民の同意に求める「社会契約説 social contract」という考え方の基礎にあるものである。近代的社会契約説の基礎は、本性的に自由で孤独な個人として生まれた人が、しかし自然状態では維持不可能となり、集団生活、社会が必要となることによって、社会契約を結ぶという構図であり、これは、17世紀のトマス・ホッブズやジョン・ロック、18世紀のジャン=ジャック・ルソー、そして20世紀のジョン・ロールズやロバート・ノージックに至るまで、社会契約説を唱える哲学者に伝統的に継承されている。
- 12) ここでの「境界」は、目に見える境界だけを意味しているのではない。全体に「属している／属していない」の境界という意味合いも含んでいる。
- 13) 同様の問題点は、「原理的に還元不可能な諸要素の原理的に制限のない結びつき」(久保 2019: 58)を基本とし、そのネットワーク全体の構成原理に言及しないという方法をとるアクター・ネットワーク理論にも当てはまるようと思われる。久保明教は、ラトウールの議論において、「外部からネットワークを限界づけ分割しうるような審級は設定されていない。このため、ネットワークの境界設定を自明視するような理解(例えば、「電気自動車をめぐるフランスのネットワークは日本のネットワークといかに違うのか」といった問い合わせ)は、ネットワーク概念を研究者が慣れ親しんだ「領域」や「体系」(System)に回収する誤解に基づいている(久保 2019: 128)」としている。
- 14) 前述した「全体—要素」関係は、こうした分割をめぐる問い合わせの1つの形である。「全体—部分」関係では、部分は全体を分割しているためにその断片のすべてを表す。「全体—要素」関係においては、全体を構成していると見なされない断片は要素とはならないことが許容される。
- 15) 小山虎はメレオロジーについて、「メレオロジーは物質的対象の存在論にとって大きな役割を果たしているとされる。なぜなら、物質的対象の間ではメレオロジーが成り立つと考えられる根拠がいくつかあるからである。そ

- の根拠のひとつは、物質的対象と空間領域に密接な結びつきがあることである。空間領域の間でメレオロジーが成り立つことは明らかだと思われる。そして物質的対象は必ず何らかの空間領域を占めるのだから、物質的対象についても、それが占める空間領域に対して成り立つとの同じ関係が成り立つと考えるのは自然なことではないだろうか」(小山 2009: 3)と指摘している。こうした空間領域や物質的対象に成立するメレオロジーが、地域が階層構造を成していると考えられる背景になっていると思われる。
- 16) 歴史的に長い間、人は自分たちの暮らす地面を自らの知覚した経験に基づき平らなものだと考えてきたし、動いているのは自分たちではなく太陽の方だと思ってきたことは、私たちの経験が科学的に正しい世界像を描いていないことを示している。現代においては、物体を形づくっている原子が固い塊ではなく、原子の大きさに対して原子核の大きさは1万分の1程度の大きさで(齋藤 2017: 2),ほとんどスカスカの領域であることをイメージしてみるといいだろう。同じように、目に見える物体を中心として組み立てられたニュートンの運動方程式がミクロな世界を描く量子力学のマクロな近似としてしか成り立たないこと、そうしたミクロな世界では「粒子」や「物質」といった描像は不確かなものとなることも、私たちの素朴な感覚と科学的な世界の描像とのズレを表現しているかも知れない。物理学者のカルロ・ロヴェッリは、世界を物から構成されているとする考えに対して「だが素粒子は、東の間の場の揺らぎでしかないことはすでにわかっている」(ロヴェッリ 2019: 99)のであり、「物理世界が物、つまり実体で構成されているとは思えない。それではうまくいかないのだ」(ロヴェッリ 2019: 100)と述べている。また認知科学者のドナルド・ホフマンは、「世界は空間と時間の内部に存在する車や階段やその他の物体から構成されていると、私たちは考えている」(ホフマン 2020: 7)ことを指摘しながら、進化ゲーム理論における「適応は実に勝る (Fitness-Beats-Truth=FBT)」(ホフマン 2020: 13)と呼ばれる定理を提唱し、「FBT定理によれば、空間、時間、形、色、彩度、明度、肌理(テクスチャ)、味、音、におい、動きなどの知覚の言語は、誰も見ていないときにも存在する実在を記述する能力を持たない。それは単にあれやこれやの特定の知覚が誤っているということではなく、この言語で表現されるいかなる知覚も、正しくはあり得ないことを意味する」(ホフマン 2020: 13)と主張している。
- 17) ZF集合論は、ツエルメローフレンケルの公理系 Zermelo-Fraenkel Axioms によって構成される集合の体系である。ツエルメローフレンケルの公理系は、次のような公理からなる(寺澤 2013: 13)。「空集合 \emptyset が存在する」、「集合 A の要素 x に関する性質 $P(x)$ があったとき、 $P(x)$ を満たす x 全体は集合である」、「集合 A の各要素 x に対して性質 $P(x,y)$ を満たす y がただ一つ存在するなら、それらの y 全体は集合である」、「集合 A, B に対して、 A, B だけからなる集合族 $\{A, B\}$ が存在する」、「集合族に和集合が存
- 在する」、「集合 A のべき集合 $P(A)$ が存在する」、「集合 A で $\emptyset \in A$ かつ、どの $x \in A$ に対しても $x \cup \{x\} \in A$ となるものが存在する」。
- 18) こうした捉え方は、システムを具体的な事物のまとまりとして読み解かることを意味しており、システムが「環境と空間的に分離しているという理解は間違っているとルーマンは主張する」(ボルフ 2014: 75)というクリスティアン・ボルフの説明にも繋がる。
- 19) システムが物理的領域と物理的な実体を持っているという想定は、「ベルタランフィの言うシステムは、各部の相互連関によって維持されている、原子から宇宙に至るまでのあらゆる実体を指す」(デーヴィドソン 2000: 22)と言われるよう、システムの一般的規定を「交互に作用する要素の複合体」(ベルタランフィ 1973: 89)と捉える一般システム理論に広く見出せるものである。複雑系・複雑適応系という用語の定義としてメラニー・ミッセルが「数多くのコンポーネントから構成されながらも、単純な運用規則を持つのみで中央制御機構を持たない大規模なネットワークから、集合体としての複雑な振る舞い、複雑な情報処理や、学習、進化による適応が生じるシステム」(ミッセル 2011: 35)とまとめているように、その後に続く自己組織化システム、複雑適応システムなどにも引き継がれている。そこでは「ネットワーク思考は、実体そのものではなく、実体間の関係に着目する思考方法だ」(ミッセル 2011: 382)とされながらも、「ネットワークとは、リンクによって互いに結びつけられたノードの集まりである。ノードはネットワークのなかの個体(たとえばニューロン、ウェブサイト、個人)に、リンクは個体間を結ぶつながり(たとえばシナプス、ハイパーリンク、社会関係)に対応する」(ミッセル 2011: 383)と実体を基本とした想定がなされている。こうした考えは、「ネットワークは複雑系にとっても、きわめて重要である」(アーリ 2019: 90)とするジョン・アーリなどの社会科学領域の中にも見られる。
- 20) こうした事態を高原康彦は、「システムの外界というのとはシステムに含まれない要素から構成されるもので、それらの様相の変化がシステムの状態変化をひき起こす可能性のあるものである。どこまでをシステムとするかは問題意識による。これがシステムを主観的存在にしている1つの理由である」(高原 1976: p. 392)と説明している。
- 21) 2000年代より、「空間を関係的に考える」という研究が急増していると言われるように(Jones 2009),人文地理学において関係論的に対象を把握しようという動き自体は広がりをみせている。「しかし「関係 relation」という言葉が実際に何を意味しているのか、「関係論的転回 relational turn」が何をもたらすのかについて、実質的な合意や検討された理論化がなされているとは到底思えません」(Harrison 2007: 590)と述べる、ハリソンのような論者も存在している。また、アンダーソンらが論じる集合体 assemblageの考え方なども、こうした対象を関係論的に捉えようとする流れだと見えるだろう。
- 22) たとえば、前述したアーリは「ルーマンの議論はあまり

- にも抽象度が高すぎる（アーリ2014: p. 151）」とし、また「ルーマンの説明は機能主義的であり、「カオスの縁」にある現代世界に関わりのある、平衡から遠く離れた偶發的なプロセスを捉えるものではない（アーリ2014: p. 151）」として、自らの分析に用いる手法から除外している。
- 23) ロバート・マートンが1949年の著書『社会理論と社会構造』（マートン 1961）で、行動の意図された機能であるマニフェスト機能と、意識的に意図されたものではない潜在的な機能の存在について論じた。マートンは、有害な潜在機能を社会内で混乱や対立を引き起こす機能障害として定義した。合理選択理論やゲーム理論における社会的ジレンマの一つである「共有地の悲劇」と呼ばれる状況も、個々人の単純な利益の追求が、共有資源の乱獲による枯渇を招く意図せざる効果の一種である。こうしたミクロな現象とマクロな変化を繋ごうという「ミクローマクロ」問題の解決は、社会学だけでなく社会科学一般的な課題であり、アンソニー・ギデンズ（ギデンズ 2015）やピエール・ブルデュー（ブルデュー 1991）、マーガレット・アーチャー（アーチャー 2007）らの社会学理論はそうした取り組みであると言える。
- 24) このことは、何かオカルトめいたことを主張しているのではない。ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの「環世界 Umwelt のことを思い出してもらえば分かるように、すべての動物はそれぞれに種特有の知覚世界をもって生きており、その主体として行動していると考えることは容易なことである。とすれば、人間の知覚によって捉えられるものだけが「存在する」と考えること、人間の想像できない世界を「存在しない」と考えることは、決して当たり前のことではない。動物や昆虫なども、世界を自らの「捉えうるもの」によって捉えており、そうして捉えられたものの集合としての世界を生きている。紫外線によって観察するものは紫外線が描き出す世界に生きているのであって、そこに人間のような豊かな「色」は存在しないし、熱（赤外線）を観察するものは、ある程度以上の熱量を持たない存在を感じない。同様に、今回の「システムの層」において存在しているのは、地域が自身とそれ以外とを区分する「差異」だけであり、そうした差異を観察し知覚しているのがシステムである。その世界は「差異」だけで構成されていて、それ以外の存在は縮減されて見えない。あるシステムを構成原理において見ると、このように、人間のそれとは異なっているとしても、そのシステムが行っている観察の内容を捉えることである。
- 25) 定義あるいは交渉過程に参加する人々の間の視点や立場から独立に存在する「実在」を想定することのメリットとは、こういった説明が可能になることだろう。多様な出来事の背後に、一貫した何かを置くことに成功する説明に必要なのが「実在」であると言える。

参考文献

- Anderson, B, Keane, M, McFarlane, C & Swanton, D 2012. On Assemblages and Geography, *Dialogues in Human Geography* 2-2, pp. 171-189.
- Harrison, P. 2007. How shall I say it …? Relating the nonrelational, *Environment and Planning D: Society and Space* 39-3, pp. 590-608.
- Jones, M. 2009. Phase Space: Geography, Relational Thinking, and Beyond, *Progress in Human Geography* 33-4, pp. 487-506.
- アーチャー, M. S./佐藤春吉(訳) 2007.『実在論の社会理論——形態生成論アプローチ』, 青木書店。
- アーリ, J./吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美(訳) 2019.『〈未来像〉の未来——未来の予測と創造の社会学』, 作品社。
- 石川統・黒岩常祥・塙見正衛・松本忠夫・守隆夫・八杉貞雄・山本正幸(編) 2010.『生物学辞典』, 東京化学同人。
- 太田茂徳 2019.〈マテリアリティ〉という視点の諸相——「これは論文ではない」, 空間・社会・地理思想22, pp. 45-62。
- 加藤雅人 2014. 中世とトマス・アクィナス——全体一部分の形而上学, 松田毅(編著)『部分と全体の哲学——歴史と現在』, 春秋社, p. 35-75。
- ガブリエル, M./清水一浩(訳) 2018.『なぜ世界は存在しないのか』, 講談社。
- ギデンズ, A./門田健一(訳) 2015.『社会の構成』, 効草書房。
- 久保明教 2019.『ブルーノ・ラトウールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探究へ』, 月曜社。
- 倉田剛 2020. いかにして社会種の実在性は擁護されうるのか——「実在論的」社会構築主義についての試論, 哲学71, pp. 49-68。
- 小山虎 2009. なぜ物質的対象は複数存在すると考えるべきなのか?, Nagoya Journal of Philosophy 8, pp. 1-18。
- サーク, J./土屋俊(訳) 2015.『心・脳・科学』, 岩波書店。
- 齋藤勝裕 2017.『数学フリーの「無機化学』, 日刊工業新聞社。
- 人文地理学会(編) 2013.『人文地理学事典』, 丸善出版。
- 新村出(編) 2018.『広辞苑 第七版』, 岩波書店。
- 高原康彦 1976. 一般システム理論(I), オペレーションズ・リサーチ21-7, pp. 388-393。
- 竹村和久 1993. 社会問題の社会心理学についてのコメント——ミクローマクロ問題と認知の共有性の問題, 心理学評論36-3, pp. 514-531。
- 田辺裕(監訳) 2003.『オックスフォード 地理学辞典』, 朝倉書店。
- デーヴィドソン, M./鞠子英雄・酒井孝正(訳) 2000.『越境する巨人 ベルタランフィ——一般システム論入門』, 海鳴社。
- 寺澤順 2013.『現代集合論の探検』, 日本評論社。
- 戸田山和久 2015.『科学的実在論を擁護する』, 名古屋大学出版会。
- 中山康雄 2014. 四次元主義の存在論と認識論, 松田毅(編著)『部分と全体の哲学——歴史と現在』, 春秋社, pp. 137-161。
- 林凌 2021. 出来事としての都市を考えるために——都市研究における「関係的思考」の理論的系譜とその問題点, 平田周・仙波希望(編)『惑星都市理論』, 以文社, pp. 277-305。

- 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・
末本文美士(編) 1998.『岩波 哲学・思想事典』, 岩波書店。
「複雑系の事典」編集委員会(編) 2001.『複雑系の事典——適応
複雑系のキーワード150』, 朝倉書店。
- ブルデュー, P./石崎晴巳(訳) 1991.『構造と実践——ブル
デュー自身によるブルデュー』, 藤原書店。
- ベルタランフィ, L. v./長野敬・太田邦昌(訳) 1973.『一般シ
ステム理論』, みすず書房。
- ホフマン, D./高橋洋(訳) 2020.『世界はありのままに見るこ
とができない——なぜ進化は私たちを真実から遠ざけたの
か』, 青土社。
- ボルフ, C./庄司信(訳) 2014.『ニクラス・ルーマン入門——
社会システムとは何か』, 新泉社。
- マートン, R. K./森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎(訳)
1961.『社会理論と社会構造』, みすず書房。
- ミッチャエル, M./高橋洋(訳) 2011.『ガイドツア— 複雑系の
世界——サンタフェ研究所講義ノートから』, 紀伊国屋書
店。
- 村田晴夫 1997. システム論の時空観, 村上陽一郎(他編)『講座
現代の哲学1 時間・空間』, 弘文堂, pp. 121-152。
- メドウズ, D. H./枝廣淳子(訳) 2015.『世界はシステムで動く
——いま起きていることの本質をつかむ考え方』, 英治出
版。
- 山下和也 2010.『オートポイエシス論入門』, ミネルヴァ書
房。
- 吉田敬 2021.『社会科学の哲学入門』, 勁草書房。
- ルーマン, N./馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹(訳)
2009.『社会の社会 1』, 法政大学出版局。
- ルーマン, N./馬場靖雄(訳) 2020.『社会システム——或る普
遍的理論の要綱 上』, 勁草書房。
- ロヴェッリ, C./富永星(訳) 2019.『時間は存在しない』, NHK
出版。